

舞踊とジェンダーに関する研究

石黒 節子
畦山恵理子・山田 奈緒
平田利矢子・李 周熙

目的

舞踊におけるジェンダーのとらえかたをJudith Lynne Hannaにもとめ、彼女の論点である〈優越のヒエラルキー〉と舞踊のジェンダーイメージの関係をあきらかにし、舞踊と女性学の権威であるChristy Adairや社会学者Helen Thomasの考え方と比較する。

方法. Judith Lynne Hannaの以下のIからIIIの著書を通して彼女のジェンダー論形成の経路を探り、ハンナの作成したジェンダーのイメージモデリングからみる舞踊の特質について触れる。Christy AdairとHelen ThomasについてはIVとVの文献をおもにとりあげた。

I. To Dance is Human: A Theory of Nonverbal Communication. Austin: University of Texas Press (1979, 1987), II. The Performer-Audience Connection: Emotion to Metaphor in Dance and Society. Austin: University of Texas Press (1983), III. Dance, Sex and Gender: Sign of Identity, Dominance, Definance, and Desire. University of Chicago Press (1988)

考察

ハンナはミンガン州立大学で政治学 (political science) を専攻し、マスター号を取得、コロンビア大学で人類学を専攻し、マスター号とドクター号を取得した。1962年から1963年にかけてアフリカのナイジェリアでフィールドワークを行っている。彼女の考え方は舞踊の動きが社会文化的なコンテキスト (背景) のなかでコミュニケーションの媒体となるというもので、環境への適応パターンとして舞踊をとらえている。これらコミュニケーションシステムのなかで文献Iでは認知的レベルでの性 (sex) とジェンダーに言及している。また、舞踊家の側の視点にたつ定義を次のようにしている。「舞踊とは、目的のある (purposeful)、意図的で (intentionally)、リズムカルで、文化的にパターン化された連続 (sequences) の、ノンバーバルな身体の動き (movements) で、非日常的な運動活動 (motor activities) による、固有の美的価値をもつ動作 (motion) をいう。」(I, p. 19)。この立場を継承しながら文献IIにおいては、舞踊家の意図と観客の情動反応をコンサート会場でしらべ、モダンダンスやポストモダンダンス及びアジアの劇場舞踊におけるセクシャリティと

ジェンダーに触れている。文献IIIにおいては、その副題—アイデンティティ、優越、反抗と願望の記号—to表されているように、記号としての舞踊のとらえかたは一層すすむ。ここにおいては、人が環境に適応するメカニズムのひとつに自然淘汰をあげ、舞踊が人間の性的魅力を提示することによって性に関するイマジネーションや行為に刺激をあたえ、男女の出会いに資するための情報をあたえることを述べるとともに、人間が環境に適応するもうひとつの手段としてコミュニケーションをあげ、そこでは舞踊が個人や集団の共有する意味を推測し、第三者に意図的にメッセージを送る文化的コミュニケーションシステムを担うものとしている。

舞踊の性的イメージ：モデリング

舞踊では性とジェンダーの関係はどのようになっているのだろうか、なぜジェンダーに焦点をあてるのかについて、まずジェンダーとは「性が生物学的現象に関係している一方で、〈性の役割〉とか〈ジェンダー〉は文化的、心理学的、社会的関連つまり規則、期待、特定の社会内での男と女としてふさわしい行動を意味する。」(III, p. 7) としながら、人間が成長する過程で「すでに用意された台本」としての社会的役割を割り与えられるのであると述べる。舞踊がどのように性やジェンダーの概念 (concepts) を伝えるのかと問いかけながら、モデルになる6つの要因を示す。

これは、人は観察したモデルの態度、行動、情動を再生する傾向があり、これは認知的にたくわえられたり使われたり、活性化されるまで潜在意識のなかに保存されるというAlbert Banduraによる社会学習理論に沿ったものである。他の社会的行動にくらべ舞踊がなぜジェンダーモデルの潜在的なかたちをもつのかという考え方が基底にある。

1. 魅惑的で、うっとりさせる (captivating) 社会や文化に抑制されている本能的な性衝動が自由なイマジネーションのなかで再生される。
2. 言語のように Language-like ノンバーバルな言語としてのダンスはどの形式も語彙、文法、意味をもつ。意味伝達のための象徴的方策 (symbolic device) をあみだし舞踊のかくれた意味を解明することを提案している。
3. 開かれ終結する (open-ended) 観客が発見したり、創造する意味について触れている。観客は自身のなかに対象としてのパフォーマンスを捕え、力を得る。演技者としてのヒーローは受け身の観客をかきまわすサディストであり、観客の炎のようにのびてくる腕のなかで犠牲になる。
4. 複合感覚的 (multisensory) ジェンダーを維持させたり変化させたりすることを舞踊はあらゆる感覚を動員し、魅了的に可能にする。

5. 説得力のある (persuasive) 舞踊の隠喩的イメージが実生活を批評的にみる目をやしない、人間の活動をいきいきさせる力をもつ。

6. 受け入れ易い (accessible) アメリカの情報網にしめる量の多さから、ダンスにおける女性の審美的な身体が西洋の文化的イマジネーションづくりに重要な役割をはたしていると見ている。

これらの要因は舞踊による身体言語が言語によるコミュニケーションより人々にじかに衝撃をあたえるという結論に導かれる。

以上の論点を基盤にしながら “Dance, Sex and Gender” のなかでハンナが言及しているのは、個々の研究領域をこえたところにある①パフォーマンス形式の動きのなかで、〈優越のヒエラルキー〉はどのように変化してきたか。これらを上位概念として②〈プロフェッショナルな舞踊製作〉における製作者と振付家およびダンサーとの関係③ダンサーによって表わされる筋肉運動的一視覚的モデルと観客の反応のなかにみられる〈ジェンダーイメージ〉との関係である。

西洋の劇場舞踊における優越の型 (Patterns of Dominance)

「西洋の高い文化としての劇場舞踊で、なぜ女性とゲイの男性が優位をしめるのだろうか、バレエのあとに発展した比較的バランスのとれた舞踊のジャンルのなかでも著名な振り付け師や支配人はいずれも男性であり女性はダンサー (労働者) なのである。」(Ⅲ, p.120) と述べながら、ハンナはアメリカにおいては女性やゲイなどの偏見のなかで非難されてきたひとびとは存在の転輸や隠喩としての舞踊にはけ口をもとめたとしてモデリングの5を検証する。一方では、男性優位にたいする女性の挑戦がバレエにたいするモダンダンスやニューダンスを生み出したことにつながることも述べる。フェミニズム及び文化研究の権威であるChristy Adairは文献Ⅳのなかでもおもに女性の地位と社会の発展との関係で舞踊制作の分析をおこなっているが、その中で、思考 (ideas) と経済 (economics) が舞踊の制作において社会の力関係の影響を受けることを指摘し、この点で常に女性是不利であることを強調する。ダンスイメージを〈創造〉するというよりはむしろ〈解釈〉するという女性の思考の立場の裏表を舞踊のテクチャーのなかで討論し、将来はもっと女性が振付師やディレクターとしてのパワーを備えるべきであると主張する。 —石黒担当—

検 討

彼女のジェンダー論は、モデリングの5にある

ような実生活を批評的にみる目をやしない、人間の活動をいきいきさせる力をもつ舞踊の隠喩的イメージを重視している。彼女の述べる〈優越のヒエラルキー〉がAdairとThomasにおいてどのような捕え方がなされているのかについて以下の点から更に検討した。

1. バレエ史にみられる凝視 (gaze) とディスプレイ (display) の観点から男性と女性の〈優勢のヒエラルキー〉について検討した。ヨーロッパの宮廷生活に由来するバレエは、ギリシャ、ローマ時代の古代彫刻にみられる理想的な身体に魅了されていたため、バレエにはこの美の継承がみられる。つまり、このような身体を創造し、ディスプレイすることに起源をもつといえる。ここに男性が凝視し、女性が見られるという図式が確立した (16-18世紀)。その後男性が創造し、女性が解釈する (19世紀) 時代をへて、テレーズ・エルスラーの『鳥籠』—1838—、プロニスラヴァ・ニジンスカの『結婚』—1923—には見られる存在から自ら見る存在に変わって行った女性像の変遷を見ることができる。 —山田奈緒担当—

2. フランスのヌーベルダンスにおける男女の〈優越のヒエラルキー〉について、ハンナのジェンダーのコード法を用いて分析した。対象としたVTRはフランスのコレオグラファー、マイケル・アン・ドゥ・メイの『Face à Face』—1986—で、独断的 (assertive) と受動的 (passive) というコードを用いて時間にそって分析し、ヌーベルダンスにおける男女のかかわりかたが支え、支えられるという古典的形式とは異なって来ていることを報告した。 —畦山恵理子担当—

主要文献

- Ⅳ. Christy Adair Woman and Dance: Sylphs and sirens. London: Macmillan Press (1992)
- Ⅴ. Helen Thomas ed. Dance, Gender and Culture. London: Macmillan Press (1993)
- Ⅵ. Hanna, Judith Lynne “The Anthropology of Dance” Dance. Current Selected Research Volume 1 Lynnette Y. Overby ed. AMS Press (1989)